

## 今週のメニュー

## ■トピックス

◇上田学園コレクション2012

－塩ビ素材を用いた「マワリマワル」が上田安子ブランド大賞を受賞－

## ■随想

◇古代ヤマトの遠景（62）－【倭の五王問題（3）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

## ■編集後記

## ■トピックス

◇上田学園コレクション2012

－塩ビ素材を用いた「マワリマワル」が上田安子ブランド大賞を受賞－

1月21日に、第128回上田学園コレクション2012がグランキューブ大阪（大阪国際会議場）で開催されました。今回のテーマは「DISCIPLINE－ファッションが私を鍛える」で、東日本大震災による大きな試練を受けて、ファッションを通じて自身を鍛え、人々に夢や希望を与えられるファッションを産み出すため、研鑽と訓練を重ねていくことが込められています。会場では学生の創作によるファッションショーが豪華に開催され、ホールではアパレル作品やバッグ・靴・帽子などの工芸作品が展示されました。

学生ブランド作品はコンセプトからデザイン・縫製・スタイリングまでを全て学生の企画で作り上げたオリジナルブランドで、8つのグループがそれぞれ7名の学生で作り上げて、当日に発表して審査を受けるものです。

魅力的なブランド作品が多い中で、上田安子ブランド大賞に「マワリマワル」が選ばれました。森で循環する生命がコンセプトで、ニット糸と塩ビ素材の異なる材料を組合せて表現したもので、抽象的デザイン構築が新しく、テーマに相応しいものと評価されました。塩ビ素材は関西ビニール卸協同組合、竹野(株)、西日本プラスチック製品加工協同組合、大比良工業(株)、日本ビニル工業会と当協会が提供支援し、これまでの産学協同の取り組みの延長で実ったもので、上田安子ブランド大賞発表の瞬間には関係者一堂喜びと感激が溢れ出てきました。

ホールに展示された作品には西日本プラスチック製品加工協同組合の幹事会社である(株)河野プラテック



マワリマワル  
mawarimawaru



産学協同作品：  
ファスナーケース

が製作支援したカラフルな「ファスナーケース」が展示され、20名の学生それぞれの個性が輝いていました。また、塩ビ素材を用いたバッグや靴も展示され、作品に取り組む学生の関心が高いことが分かり嬉しくなりました。

今回の大賞受賞はデザインによって塩ビ製品の新たな価値を創造する機会になり、若い学生に触ってもらうことで何かが生まれてくると感じました。その何かを塩ビ関連団体がビジネスに活かして成果に結び付けていくことが大切と思っています。これからも、上田学園と塩ビ業界とのコラボレーションが続けられますが、是非、これからも期待を持って見守って頂きたいと願っています。東京、名古屋など全国のデザイン関連学校でも、地場産業の振興の機会があれば声をお掛け下さい。(了)

## ■ 随想

### ◇古代ヤマトの遠景（62）－【倭の五王問題（3）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

④ 次に注目されるのは四五一年の記録である。この年に倭王済は加号され次のように極めて立派な官爵を賜っている。

〔従 来〕安東將軍・倭国王

〔加号後〕使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、  
安東大將軍、倭国王

この加号後の官爵は先の倭王珍が希望していたものとほとんど同じであるが、なぜこのような大盤振る舞いを宋王朝が行ったのかは謎である。しかし、このような宋王朝の叙爵から、倭国内の状況がある程度見えてくるといえよう。

まず考えられることは卑弥呼時代のような状況が倭国内に再び起こったのではないかということである。二四七年、卑弥呼が狗奴国との苦戦の状況を伝えると、魏王朝は帯方郡から張政等を遣わし、卑弥呼を激励している。これと同様のことが倭王済のときも起きたのではないかということである。

四五一年の朝貢時に、倭王済は遣使に反倭国連合軍との戦いが進展せず、その窮状を伝えさせた可能性は高い。倭国の状況のただならぬことを理解した皇帝は、直ちに加号を決め、倭王の二十三人の臣下に対する除正申請も同時に承認した、といったことが想定されるからである。このように解釈すると、この四五一年条の内容は無理なく理解できるし、倭国内の状況も更に明確になって来る。

以上のような宋王朝の配慮で、倭王済の軍は大いに志気があがり、西国内での大勢を決することが出来たのではなからうか。もしそうであれば、済の在位期間が約二十年にもなることから、済は偉大なる王と呼ばれていた可能性は高い。記紀では允恭天皇とされているが、このような済王の偉業を引継ぎ、その総仕上げを行ったのが倭王武だったことになる。

⑤ 宋書の記録の中で次に注目されるのは、百済と任那の問題である。倭王珍が希望した官爵の内、六国諸軍事の内容と倭王済が授かったその部分を比較すると次のようになる。

〔珍の希望〕 倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓

〔済の除正〕 倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓

この記録で先ず注目されるのは、珍が希望した官爵には「百濟」が含まれているが、済に対してはこれが削除されている点である。珍はかつて百濟も新羅も倭国に質を出していることから、彼らは倭国の服属国であり、従って統治権があると看做していたことは十分に考えられる。

しかし、百濟はその後、独自に北朝の北魏、南朝の宋と通行して外交関係を樹立しており、更に宋王朝からは鎮東大將軍まで与えられている。このような状況から百濟が外されたのは当然のことといえる。

新羅が残されているのは、当時の新羅はまだ発展途上国であって、国としての体を為して居らず、中国から見ればその存在がわずかに知られていた程度であったと考えられる。このような状況から、利害関係の無い宋としては、倭国の要望をそのまま認めたと言うことであろう。

次に注目されるのは「任那」である。この語によって示される地域は、倭国と宋との間で違いがあり、倭国は加羅を含めているのに対し、宋は別の国としている点である。この相違点の詳細を論じるのは省くが、いずれにしても、任那という地方の存在を宋王朝が認めている点は重要といえる。

- ⑥ 四七八年の倭王武による朝貢は、倭の五王による最後の朝貢という意味で注目される。これまでの倭国王による朝貢は、肩書き欲しさによる朝貢だったといえるが、その肩書きが反倭国連合軍に対して有効であると考えられていた点で重要であった。ところが倭王武の場合は、これまでのような切羽詰った状況からの朝貢ではなく、遂に倭国の平定は成った。後は宋王朝から望みうる最高の肩書きを勲章としてもらえれば幸いだ、といった程度の朝貢だったようであり、この点で特異であったと言える。従って、これが最後の朝貢となった理由も良く理解されるのである。

このような解釈を可能にしているのは、倭王武が提出した「上表文」にある。この上表文はかなり長いものであるが、要約すると次のようにまとめられよう。

- イ 我国は中国から遠く離れていますが、外臣としてその藩屏となっています。
- ロ 昔から我が祖父達は、自ら甲冑をつけ、山川を跋涉して東の毛人、西の衆夷、北は海を渡って多くの国々を平定しました。
- ハ 臣も先王のあとをついで中国に朝貢するため百濟経由の船を用意しましたが、無道にも高句麗が百濟を併合しようとして、非道な殺害をやめようとしません。このため朝貢が滞っています。
- ニ 臣の亡父済は、高句麗が中国へ通じる路を塞いでいることを怒り、百万の軍で高句麗を攻めようとしたのですが、にわかに父と兄が亡くなりこの企ては行われませんでした。
- ホ 自分は軍備を整え、父兄の志を叶えたく思っていますが、もし、皇帝の威徳で強敵の勢いをくじき、危難を乗り越えられましたら、父兄の功を変わりなく受け継ぐことが出来ましょう。



雄略天皇陵 (上下とも)  
(大阪 羽曳野)

※倭王武は雄略天皇と  
考えられている

へ ひそかに、自ら開府儀同三司かいふぎどうさんしの官を名乗り、またその他の爵号を授かって、忠節を励みたいと存じます。

この上表文は一体何のために書かれたのかということであるが、これは最後の項を願い出たものであることは直ぐわかる。イ～ホ項まではその前文である。この上表文を読む限り、倭王武が追い詰められているような雰囲気は全く伝わってこない。更に高句麗を攻撃することなど何も約束されていない。要するに武は「開府儀同三司」が欲しかったのである。これは府を開設できるという名誉的な官号で、宋朝でこれが認められていたのは4人しかいなかったという。そのうちの一人が高句麗王こうれんの高璉であった。武は高璉がうらやましかったのである。結局、宋朝が武に認めたのは次のような官爵であった。

使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭国王

結果的に、武が希望した「開府儀同三司」は認められなかった。そして、翌年の四七九年に南朝宋は滅び、齊が建国される。しかし、倭国から朝貢の使が遣わされることは無かった。倭王武の時代に西国の平定が成ったからであろう。最早、中国皇帝の権威に頼る必要が無くなったのである。

(つづく)

前回：[「古代ヤマトの遠景」\(61\) - 【倭の五王問題\(2\)】 -](#)  
[「古代ヤマトの遠景」: バックナンバー](#)

## ■ 編集後記

通勤電車の中では、楽しいことからイライラすることまで毎日小さなドラマが繰り広げられています。この時期はまだまだ寒い日が続くため、厚手のコートとマフラーに着膨れした老若男女が押し合いへし合いを繰り返し、居心地の良い場所を求めて彷徨います。幸運にも目の前の席が空いてホッと腰掛ける人、後ろから押されてつり革にしがみ付き筋肉痛に悩まされる人、流れに任せて自立を避ける寄りかかり人、耳元で音楽があふれ出ながらも自己中心で酔いしれる人、マスクの中でもズルズルと鼻を鳴らして顔を赤らめる倒れ人、大きな荷物で入口付近を占拠している出張人・・・。いつも遅れることに慣れながらも黙々と今日を歩む都会人たち、学び、働く人々が通勤のストレスを乗り越えて無事に一日を過すことを願い、流れのままに水天宮の改札を通り過ぎていきました。(円行)

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)、[メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)

